

虹

に

いつだって学び直せる



法政大学で本を読む小島さん

①88 アラサーからの学生生活

推しはトム・ヨークだ。世界的なロックバンド「レディオヘッド」のボーカルである。洋楽ロック好きの小島真央さん(34)＝富山市出身＝は11月、初の来日ソロツアーに心躍らせた。一挙手一投足に見とれた。

最近このロックスターのように、胸をときめかせた存在がいる。社会学者の上野千鶴子さんだ。上野さんは女性学の権威であり、小島さんと同じく富山が故郷だ。

小島さんは法政大大学院で公共政策を専攻する。専門とは別に、社会学的手法で同性愛者の就労についても研究しており、上野さんを仰ぎ見る。11月半ばに京都で開かれた学会で講演を聞いた。圧倒的な情報量で社会学の現在について凝縮する語り口に全身がしびれた。ギターの轟音が耳を突き刺すようだった。「お話の一つ一つが面白くて、カッコよすぎでした」とうっとりする。

小島さんは34歳。ずっと学校は苦手な17歳で高校中退した。当時は勉強に大きな意味を見出せなかった。しかし、曲折を経て30歳を目前にして大学生になった。今は学ぶ喜びに満たされている。

小島さんが師事し、奇しくも同姓の小島聡教授は「スポンジが水を吸い込むような勢いを感じる。ゼミに沈黙が訪れると、風を起こすのは彼。人生経験のおかげか、空気を読む。慕っている学生は多い」と話す。

◇

両親は小学校に上がる前に離婚した。母と2人きりの生活は楽ではない。電気やガス、水道といったライフラインはたびたび止められた。それが当たり前だと思っていた。だから母を手伝った。幼い頃から一緒にキッチンに立ち、自然と料理を覚えた。

小学生の時はそれなりに勉強ができたが、高学年になると学校に足が向かなくなった。起きられなかった。母が夜遅くまで仕事をしている間、ずっとゲームをして帰りを待った。当然朝は苦手だった。

中学生になっても変わらない。学校へ行くのは月に数日程度。家でゲームをするか、カラオケに行くかという生活に陥った。高校生になるとアルバイトを始めた。困窮する家計を支えられた。飲食店で働けば好きな料理の腕も磨けたし、電話代も払えた。「大黒柱という大げさだけど、細い柱にはなれた。自分でも稼げるんだって自信も持った」。生きるためのお金の前で勉強はかすんだ。出席日数不足により、2年から

3年に進級できず留年した。年下の同級生の目が気になり、学校に行けなくなった。そのまま除籍になった。

母は当時、小さな居酒屋を始めており、小島さんも一緒に厨房に立った。貯めたバイト代から資金も出していた。カウンター席とテーブル席のある小さな店だった。エスニック料理を売りにした店は、転勤族のよりどころになっていた。

常連客の多くは有名大学出身だった。話題が豊富でマナーもいい。「ちょっと学歴コンプレックスになっていましたね」。彼らに憧れつつ自分や母をとがめた。高校を卒業できなかったことを悔いていた。

店は繁盛した。予約を断ることも増え、手狭だった店を移転することにした。親子だけでやっていた店でアルバイトを増やした。ビールの輸入販売も始めた。しかし新しい挑戦を機に、風向きは変わった。客足が想定よりも伸びず、輸入ビールの販売も低



「小春日和 広田 都世

調だった。アルバイトに声を荒げたり、冷たい態度を取ったりすることも増えた。

小島さんはゲイだった。意図せずしてそのことが母に知られ、親子関係がこじれていった。仕事のストレスも重なり、適応障害を発症していた。店の10周年を迎えようとする日のことだ。母と店のこれからのことで衝突した。激しい言葉をぶつけ合い、胸の中で何かが決壊した。悔しさや責任感はあるが、心がついていかない。足に鎖が付けられたかのように一歩が重くなった。限界だった。親子2人でやってきた店の経営から手を引いた。柱が抜けた店は長く続かなかった。しばらくして看板が下ろされた。

◇

小島さんは東京で仕事を探した。食品関

係の会社であれば知識を生かせると思った。パソコンも英会話も得意だ。実務に自信があった。しかし、ことごとく門前払いされた。大卒でなければ入口に立てなかった。

社会の理不尽に直面し、「大学に行きたい」と心底思った。これまで心の中でふたをしていた望みだ。金銭的には厳しいが、奨学金を頼ればどうにかなりそうだった。2019年9月、高卒認定試験の勉強を始めた。

読書体験が乏しく国語は苦手だった。知識の積み重ねがないから数学も分からない。一方で、独学で勉強していた英語は得意だった。社会科系の科目には夢中になった。ぼんやりとしか知らなかった選挙や政治の仕組みを知ると、世界を見る目が変わった気がした。認定試験合格後、センター試験に臨んだ。翌春、第一志望ではなかったが、都内の私立大学に入学した。飲食店時代の経験が役に立つかと、経営学部に入った。29歳からの学び直しがスタートした。

コロナ禍で始まった学生生活に入学式はなかった。当てにしていた飲食業のアルバイトも減り、綱渡りのような暮らしだった。それでも、高校よりキャンパスは居心地が良かった。10代ばかりの同級生にはすんなり溶け込めた。ランチにも誘ってくれた。ただグループディスカッションで発言すると、年長者扱いされ必要以上に意見を尊重された。「やりにくいから空気を読んで、最後に発言するようになっちゃった」と笑う。

授業は受験勉強以上に面白かった。経営学は腹に落ちた。差別化やコスト戦略などの理論が、自身の成功や失敗と重なった。1年過ぎた頃には「大学って4年しか勉強できないのか」とまで思うようになった。早速、大学院進学が視野に入った。

一方で、当初の大学のカリキュラムが物足りなくなった。法政大学人間環境学部が社会人向けのプログラムを用意しており、3年生から編入した。社会学や政治学、英文学も横断的に勉強できた。心惹かれた学問の一つが社会学だった。

社会学は「当たり前」を疑い、社会の仕組みを問い直す。これまで小島さんはまともに学校に通わなかったことを自分や母のせいにしてきた。地方でのゲイの生きづらさを仕方ないと割り切ってきた。しかし、社会学は小島さんの中の「当たり前」を変えてくれた。社会学の理論では、個人が抱える問題の多くは努力や能力だけでは解決しがたい。システムや世の中の価値観に縛られるからだ。こうした視点に触れ、自分を客観視すると少しだけ救われた気がした。

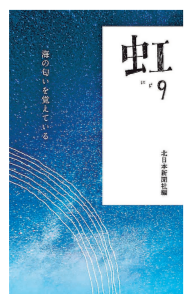
小島さんの学生生活を支えてくれたのは「民泊」だった。空き部屋を宿泊施設やパーティールームとして貸し出す運営会社でアルバイトを始めた。最初は部屋の清掃要員だったが、業務プロセスの改善をアドバイスすると重宝がられた。結局、運営側のスタッフになり、さまざまな業務を請け負っている。経営者の経験と、経営学の知識が生きる。学歴ではなく実力が買われた。収入も安定し、富山にいた母も東京に呼び寄せた。相変わらず衝突を繰り返しているが、たった1人の家族だ。

今、所属する大学院では民泊を研究する。単なるビジネスモデルとしてではない。社会的課題の解決という観点から民泊を捉えようとしている。騒音やゴミ出しのマナーなど周辺住民への悪影響も問題視されるが、前向きな解決策を探る。自身も民泊を通じ、社会的弱者をサポートするソーシャルビジネスができないか考えている。

気負いもなく充実した日々だ。「ストレートに入学していたら大学が今ほど楽しかったのかな」。自身の経験と、学問の理論が重なった時の納得感は多分なかった。

アラサーからの学生生活を回り道とは思わない。必然だった。今はもう学歴コンプレックスなんてない。ただ学べればいい。

クイズ王と称される伊沢拓司さんは「楽しいから始まる学び」をテーマに掲げ、活動しています。楽しさが先立てば、一見面倒な勉強のハードルは下がるのでしょうか。小島さんは今、学ぶこと自体を楽しんでいます。彼のように大人になって大学で学ぶことにも大きな意味があると思います。人生の道筋は一つではないはずですから。



「虹」第9集 販売中

「虹」を書籍化しています。最新刊の第9集『虹 海の匂いを覚えている』は2022年9月から24年5月までに掲載した20編を収めています。1,100円。問い合わせは北日本新聞社出版部、電話076(445)3352(平日午前9時～午後5時)。

心があたまにたまるエピソードや、この紙面についてのご意見、ご感想をお寄せください。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
北日本新聞社西部本社「虹」係
FAX 0766-25-7773
mail niji@kitanippon.jp
次回掲載は1月1日(水)です。

紙面提供/人と鉄のあいだに

OTANI 大谷製鉄株式会社

企画・制作/北日本新聞社
メディアビジネス局